

暑さ寒さも彼岸まで

まもなく秋のお彼岸がやってまいります。「彼岸」とは昔のインドの言葉、サンスクリット語の「パーラミター」(波羅蜜多)という言葉をも漢訳した「到彼岸」の略名で、迷いの世界である「比岸」から悟りの世界である「彼岸」へ到達するという願いが込められた言葉です。特に、彼岸の中日である春分の日、秋分の日には、太陽が真東から昇り真西に沈み、昼と夜の時間が等しくなります。そしてその真西に沈む太陽に人々は、遙か彼方に仏さまの浄土を憧憬し、そこに在ろう悟りの世界を思い、浄土への往生を願うことでしょう。

冥途の飛脚

そんなお彼岸には、ご先祖さまへの感謝を込めてお墓やお仏壇にお参りします。その時、ご

先祖さまは遙か彼方の浄土から我々を見守っておられます。そして私たちは日々精進して安らかなる日々を願うのですが、。しかし、最近の世の中はどうでしょう。目を覆いたくないような殺伐たる事件が頻発し、その度に心を痛めます。そして、そのような世相を反映してか、巷では、いよいよ来年からスタートする裁判員制度が話題となっています。これは刑事裁判に国民が参加して、有罪か無罪か、そして有罪の場合、どのような刑にするかを裁判官と一緒に決める制度で、裁判官がより身近になるといわれています。

十王の裁き

それは先ず亡くなって七日目の初七日から始まります。最初の裁判官は秦広王。「殺生」の罪を裁く裁判官です。次が十四日目、二七日の初江王。しかしながらそこへ行くまでに「三途の川」が流れています。川の手前が賽の川原。この場所が「深み」「浅瀬」「橋の上」と分かれています。ある時代からは渡し舟も運航し始め、渡し

判官によって生前の罪の裁きを受け、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天のいずれかの世に生まれ変わるという信仰ですが、「極善極悪には中陰無し」で、両極端の人は即決で極楽、もしくは地獄に行くことが決まるのですが、大抵の人はそれなりに善いことも悪いこともしてきたので「冥途の旅」が始まるのです。しかし！この時の裁判には「追善供養」という制度があり、この日までの、家族の亡き人への供養が酌量されれば、判決は次週に延期となります。そして次週、二十一日目には宋帝王の法廷に。ここではネコとへびにより「邪姪」の罪が裁かれます。二十八日目には五官王の法廷。ここでは秤が置かれ生前の「行動」と「言葉」の罪を表示するらしい……。そしていよいよ三十五日目。あの名高い閻魔王が裁判官となって裁きが始まります。閻魔王の前には浄玻璃の鏡が置いてあ

り、生前の悪行が映し出される仕組になっています。現代なら証拠のビデオというところでしょうか。……。四十二日目には変成王の法廷、ここは秤で裁いた五官王と浄玻璃の鏡による閻魔王の裁きをあわせて再審査されます。

そして最終の判決が四十九日目に泰山王によって下されるのです！またその後も、百カ日は平等王、一周忌は都市王、三回忌は五道転輪王と、恐ろしい裁判官の役目をする王によって裁かれます。

しかしながら、これら十人の裁判官の王は、実は背後に仏さまのお姿も持って



真言宗智山派、京都大山崎町の名刹・宝積寺の閻魔堂にお祀りされる「閻魔さま」(中央)と、故人の生前の善悪の行いを閻魔さまに報告する「俱生神」(奥向かって右)、「暗黒童子」(奥向かって左)。そして手前向かって右は閻魔さまより下された罪状を読み上げる「司命」、手前向かって左は判決文を記録する「司録」です。いずれも鎌倉時代の作で、閻魔さまの像としては日本でも古く、また優れたものであるといわれています。閻魔さまの前に立ったときに「しまった！」とならないように、「十善戒」に則した生活を送りましょう！(写真提供/宝積寺)

おられます。秦広王は不動明王。初江王は釈迦如来。宋帝王は文殊菩薩。五官王は普賢菩薩。閻魔王は地藏菩薩。変成王は弥勒菩薩。泰山王は薬師如来。平等王は観音菩薩。都市王は勢至菩薩。五道転輪王は阿弥陀如来です。怖い姿で死者の前に出現されるのも、反省を促し教え導くためで、決して罰を与えることが目的ではありません。今でも中陰の期間はそれぞれの忌日の仏さまをおまつりしてご供養するのはこんな信仰からきています。お彼岸を機会にご先祖さまへ追善のお参りをすると共に、「十王」に裁きを受ける前にご自身の模擬裁判をしてみても如何でしょうか。「十善戒」という六法全書を片手に